

令和6年度 わかふじ幼稚園 自己評価報告書・学校評価報告書

2025年3月11日
わかふじ幼稚園

1. 本園の教育目標

健康で、明るく、素直な、なんでも一生懸命に頑張る子を育成する

指導方針：

『幼稚園教育要領（文部科学省）』に準拠すると共に、次の事項を重視した指導をめざす

- ・園児が遊んで取り組めるような雰囲気や環境づくりをする
- ・いろいろなことをやってみようという意欲を持てるようにする
- ・仲良く、ともに喜び合う気持ちを持てるようにする
- ・小さな発達を大切にし、根気よく繰り返し指導する

2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

2024年度年間目標：クラスをこえた友だちとの関わりを大切にしよう

- ・他のクラスや先生にも自分から挨拶をしよう
- ・どの学年の子でも名前呼び合える友だちになろう

2024年度クラス目標：

年少 保育者や友だちに親しみを持ち、友だちとふれあいながら、安心して遊びや活動に取り組む。

園生活の流れが分かり、自分の身の周りのことをしようとする。

年中 全身のバランスを取りながら身体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。

豊かな遊びや生活の経験を通して必要な言葉を身につけ、いろいろな方法で表現する。

年長 園生活に見通しを持ち意欲的に活動に関わり達成感や充実感を得よう。

自ら考えて行動する力を身につけよう。

2024年度重点的に取り組む教育目標；

- ・子どもを中心に保育の実践を考える：子どもを中心とした視点から教育をとらえ直す
- ・人権擁護の視点から不適切な関わりをしない保育・教育を考える
- ・幼児期の体力向上の習慣形成を推進する

2024年度 園の取り組み課題：

- ・働き方改革の推進
- ・子育て支援としての早朝保育の拡大
- ・就学までに育てほしい子どもの姿に向けての園内連携と幼小中連携の推進
- ・キッズイングリッシュの導入
- ・わくわく「縦割り保育」の運営
- ・未就園児教室「バンビ」の内容を検討
- ・満3歳児保育の受入れ検討

3. 評価の経過

2024年1月	2024年度年間予定の検討
2024年3月	それぞれのクラスごとに2023年度年間指導計画ふりかえりを実施 2024年度自己評価課題設定／2024年度重点的に取り組む目標設定
2024年4月	学校関係者評価会議委員依頼
2024年5月	それぞれのクラスに応じた年間指導計画の立案
2024年8月	年間指導計画の1学期ふりかえりに基づき2・3学期指導計画の再構築
2024年9月	運動会保護者アンケート実施
2024年12月	リズム発表会アンケート実施
2024年12月	年間指導計画の2学期ふりかえりに基づき3学期指導計画の再構築
2025年2月	作品展保護者アンケート実施 「園生活ふりかえり」保護者・教員アンケート実施 学校関係者評価会議開催
2025年3月	教職員による2024年度課題自己評価実施 教職員による2024年度自己評価点検評価会議 自己評価報告書の作成／学校評価報告書の公開

4. 自己評価指標の達成および取り組み状況

今年度の自己評価指標は「教育目標・教育方針」3項目、「教育課程・指導計画」6項目、「教育環境」6項目、「教育の内容・方法」5項目、「教師の役割・資質向上」5項目、「子育て支援」4項目、「地域住民や関係機関との連携」5項目、「運営管理」6項目であった。

各教職員は、各指標につき、それぞれの評価項目が達成されているかどうかの段階評価（4段階評価）、およびその評価結果の根拠・理由になる取り組み現状、改善を要する点や課題を記述した。各教職員が自己点検評価をした結果を自己点検評価会議で総括し、評価項目における達成、園の取り組み状況について、評価レベルの判断をした。また教職員の記述より抜粋した内容を、表1「評価指標の達成および取り組み状況」に示した。

取り組み課題の到達度については、「十分達成されている」というA評価だったのが、「教育目標・教育方針」、「教育課程・指導計画」、「教育環境」、「教育の内容・方法」、「子育て支援」、「地域住民や関係機関との連携」、という6指標であった。これらの中から、今後、新たに取り組むべき課題がみいだされた。

また、「達成されている」というB評価だったのが、「教師の役割・資質向上」、「運営管理」という2指標であった。これらの中には、今後、年間を通しての活動の位置づけを検討する必要性も指摘された。

2024年度重点的に取り組む教育目標についての到達度、取り組み状況は次の通りである。

「子ども中心の保育実践を考える」については、幼児期の遊びを通しての学び、主体的な活動を通じた学びを教育課程の中でどのように位置づけるのかと言う点で、これまで行なわれてきた行事のあり方などをとらえ直す機会となり、活動の目標をとらえ直す試みが始まっている。

「人権擁護の視点の意識化」については、教員が意識せずに気がつかないで行なっている、保育の中での不適切な言動や関わりがないか、教員の思いが保護者に適切に伝わっているかなどは、日常的な保育のふりかえりの中で確認してきた。

「幼児期の体力向上プログラム」は、取り組み2年目となり、教員も資格取得など学びを深め、年2回の測定もスムーズに行なわれている。年間計画に即して、一日60分をめやすに体を動かす活動を進めてきている。

表1 評価指標の達成および取組み状況

指標	取組み課題	取組み状況	評価
教育方針	①クラスの年間目標は具体的保育に結びつけてきた ②クラスの年間目標は子どもたちの園生活に生きてきている ③教育方針は、その時々幼児に合うよう見直ししている	年長：活動意欲を引き出す指導、関わりを心掛けた。キャリア教育では自発的に質問する姿や、知らないことを学ぶ姿勢が見られ意欲的に活動に参加していた。 年中：年間目標は学期ごとにふり返り修正追加をし、目標に向け保育をした。日々の保育でも、この1年で伸ばしたいところを目標にし、常に意識して声を掛けてきた。2人担任が情報を共有し、目標を確認して同じ方向で保育ができるよう努め、子どもの関心を活動に取り入れた。 年少：年間計画に基づき、月間目標・週案を計画し、子ども達の園生活に生きていく。学期ごとに、計画と子どもの成長、保育の進捗状況を照らし合わせて、計画の時期を早めたり、またできなかったところは意識的に取り入れるよう心がけた。	A
指導計画	①園の教育課程は、教育目標を生かして作られている ②子どもたちの年齢ごとの教育課程がある ③園の教育課程は、教職員が話し合いながら作られている ④園の教育課程は見直されている ⑤幼児のしたいことや、興味のあることを取り入れている ⑥幼児の教育に、地域の自然や施設を活用する	園の教育目標を基に保育をしている。各学年で年間指導計画があり、学期ごとに反省点や次の学期に向けて改善するところ、伸ばしていきたいところを共有している。教員間で必要なアドバイスをこなす。日頃の保育カリキュラムの中に偏りなくいろいろな活動を入れている。年間を通して職員会議の予定も組み込まれており、さらに年度の初めには教職員間でどんなクラスにしていこうか話し合いの場を設けている。担任の考えだけではなく、他の職員に意見を聞くことは大いにある。また子ども達の考える力を大事にし、意見を言う場を保育の中で多く取り入れ主体性を重視し、子ども達の発言力が伸びた。園外保育、キャリア教育、幼小中連携の活動が地域との関わりにつながっている。 クラスの様子を見ながら興味のある事は沢山取り入れるようにしている。園外保育に行っている。地域子どもや公園でその季節の花や木を楽しみ、そこで、であった地域の親子さんとの交流、近隣の保育所との待ち合わせ交流をした。	A
教育環境	①活動の環境を作る時には指導計画を意識している ②幼児の動きや視線の動きに気を配った構成をしている ③自然や社会との関わりが持てるような体験を取り入れる ④環境構成について教職員間で積極的に意見交換を行なう ⑤年齢の異なる幼児が、ふれあえるような環境構成をしている	『少し難しいけれど、頑張れば手が届きそうなおもしろい』を意識して指導計画を立て実行し、子どもたちの成長に繋げることを意識した。 保育のアドバイスを職員室で話すことが増えたと思う。それにより教職員間で共有することができ、互いの保育観を知り学ぶきっかけにもなった。わくわく保育、合同クローバーや園外保育で異年齢交流を多く取り組み、異年齢交流が日常的になった1年だった。 子どもが加代海を持ち、楽しんで活動できるような導入、活動に即した子どもの動線を意識した室内外の環境設定の工夫、クラス運営にあたり、活動の個人差を踏まえ、個に応じた対応だけでなく、コアメンバーを待たせないような工夫、複数担任同士の言葉の掛け合いに努めた。 年度途中から導入した満3歳児保育については、試行錯誤の対応が繰り返され環境構成のあり方を原点から捉え直す機会となった。	A
教育の内容・方法	①教育内容や方法は、園の教育課程を基にしている ②幼児の家庭での様子を参考に、援助の内容を工夫している ③栽培や育成、食育に取り組む ④遊びを通してルールを学んだり、との立ちとの関わり経験を積めるよう工夫している ⑤意欲的に造形活動（描画・製作）をする時間を取っている	教育内容は年度はじめに職員間で話し合い、教育過程を基に作成している。要支援の場合、家庭の様子を聞き園の姿を伝え、園と家庭と協力し合い援助や声掛けの仕方を統一するようにした。栽培は、春から夏にかけて、枝豆、オクラ、キュウリ、ミニトマトを育て食した。特に今年は、パケツ稲づくりに挑戦し、4月の連休前から芽出し、土壌作り、苗の植え替え、水抜き、稲刈り、脱穀、精米、炊飯し試食し、食育に繋がった。年長は給食時に食育ボードを使い、食材がどの栄養につながるのかを知り、好き嫌いをなく食べることの意味を子どもが考えた。楽しく遊ぶにはルールを守ることを年齢に応じて気づく機会を日常的に心がけている。喧嘩が起きた時、相手の気持ちを伝え、自分の気持ちばかりにならない様に声を掛けている。時折意見のぶつかり合いもあるが、それも経験と捉え見守っている。廃材遊びは、はさみやテープ等を使って創造力を駆使して楽しんでいる。使って製作している。造形活動と他の活動の時間的バランス、美術の技法を積極的に取り入れ、子どもたちが作っていて胸が躍る製作物をもっと考えていきたい。	A
教師の役割	①一人一人の幼児をよく観察するように心がけている ②すべての幼児に平等に接するように心がけている ③その場にふさわしい言葉遣いができる ④研修内容は園内で共有する ⑤保護者との信頼関係がある	子どもをよく観察し、個々に必要な対応や接し方に気をつけ、その場にふさわしい言動で、子どもにとってのモデルになるよう気をつけているが、教員によって自己評価に幅がみられたあった。特にクラス運営にあたり、個人差の幅が大きく、できる子が手持ち無沙汰にならず、発達が進んでくっつきやすい子が置いてきぼりにならないような活動の進め方に葛藤を持つ教員もみられた。子どもの育ちや、子ども同士の関係性、園の活動に心配を持つ保護者への情報の伝え方、面談のあり方などへの意識化の重要性が気づきとして指摘された。個別に受けた研修を園全体で共有する十分な時間が持てなかったことが指摘された。	B
子育て支援	①保護者の子育て相談にのっている ②子育て支援の内容について教員で話し合いをしている ③3歳未満の子育てを支援している ④専門機関と連携を取っている	毎学期の定期面談のほか、面談の要望があれば随時設定し応じている。毎日の申し合せ会議などで必要な子育て支援対応も共有している。園庭開放は原則毎週、未就園児教室も定期的に2回/月開催し、11月からは親子分離クラスを実施した。満3歳児保育を始め、2歳児の教育過程に取り組んだ。早期保育も年間を通して実施が定着した。園児見学は予約制で随時行っている。園児が利用している専門機関や行政との連携を行なっている。	A
地域住民や関係機関との連携	①地域の人と親しく挨拶する ②小学校の行事や授業を見学に行く ③地域の人は、園に興味を持ったり、園の方針を理解している ④お祭りや伝統行事に参加する ⑤お年寄りとの交流機会を持つ	園外保育に行くときすれ違う人に子ども達も挨拶をする習慣が身につけてきた。小中連携、お仕事体験、C保育園との関わりなど地域に密着した活動を多く取り入れた。学びの体験が子どもの自信につながった。毎年、前年度と今年度の担任が小学校授業見学に行っている。架け橋プログラムで小学校との交流、中学校との交流を複数回実施した。小中学校教員も園にて情報交流を行なった。町内子どもみこし中継点に園庭を提供し、園児家庭に参加を呼びかけ協力した。未就園児家庭を対象に夕涼み会、園祭り、運動会、移動動物園に招いた。学校関係者評価委員として保護者の会や町内会より参加を要請し地域としての助言を得た。	A
運営管理	①園児・保護者の個人情報守秘 ②現金の管理は間違いなく行なう ③災害や事故報告書の記入の周知 ④保護者の意見はしっかりと聞き、園長に報告している ⑤園の安全点検、衛生管理実施 ⑥園内での役割分担が明確	運動会、リズム発表会、作品展、園生活振り返りアンケートで保護者の意見や要望を得た。現金の授受、管理、記録は今後も間違えないように留意する。園の危機管理マニュアルに即して、園における学校の安全計画を見直している。避難訓練を幼児の災害安全教育に組み込む方向で取組中である。ヒヤリハット、事故報告書を活用し教職員間で共有している。園の施設の安全点検は毎学期実施し、衛生管理は年2回の園業別師の指導を受け見直している。園内の役割分担は年度初めに明確にしている。複数担任の協力連携役割分担は今後も継続する。このカテゴリーは教職員のキャリアによって認識の違いがあった。運営管理について全教員の理解を深めていく。	B

A 十分達成されている / B 達成されている / C 取り組まれているが、成果が十分ではない / D 取り組みが不十分である

5 本年度の園における取組み課題と取り組み状況

働き方改革の推進：

朝当番の早朝出勤を廃止し、全員が定時出勤し清掃・安全点検に変更した。日直、週間、月間、学期間、年間の清掃・安全点検のあり方を確認した。許可残業、残業報告書への記載を申し合せて徹底し、効率の良い仕事の進め方を促進した。保育内容、シール帳、クラス便りのあり方など検討を進めた。

事務作業におけるICT化を進めた。前年度に進めたデジタル化が順調に運用されていたので、出欠席・遅刻・早退連絡、早朝保育申込み連絡、預かり保育申込み連絡をWebフォーム入力とした。園からの情報配信も引き続きオンラインとしたが、安全性・利便性を調和させて、クラスごとのロックは除去し在園者ロックのみに変更した。園内外に向けてインスタグラムを作成公開した。年間を通して安定した頻度でのアップロードに課題が残った。

子育て支援としての早朝保育の拡大：

教育時間のある日だけでなく長期休暇も含め、年間を通して早朝保育を実施できるようにした。年間を通して早朝保育の利用は、ほぼ毎日利用されている状況である。子育て支援ニーズが高いことが窺われた。

- ・ICTの活用推進
- ・就学までに育ててほしい子どもの姿に向けての園内連携と幼小中連携の推進
- ・キッズイングリッシュの導入
- ・満3歳児保育の受入れ検討現在、ほぼ毎日利用されている状況である。

幼小中連携・接続：

架け橋期（年長4月～1年生3月）カリキュラム作成に向けて一歩が踏み出せた。園児と児童との交流は4回、園児と中学生との交流は2回実施できた。教員間の事前打ち合わせ、事後ふり返りも含め成果評価が次年度に発展的継続が期待された。

キッズイングリッシュ「クローバー」：

毎週1回、15分間、担当者が各クラスを訪問して行なった。歌や手遊び、絵本やペープサートなどで英語に親しむ時間を持った。年少は繰り返しを、年長はゲーム感覚を取り入れるなど異言語異文化体験を継続した。

わくわく（縦割り保育）タイム：

異年齢固定メンバー構成で、同じ指導者が午前中の主活動を毎月1～2回実施した。異年齢ならではの交流や関わりがみられ、相互の関係性が深まった。

未就園児教室「バンビ」

4月～3月まで毎月1～2回実施した。11月以降は、親子分離して満3歳児クラスの園児と活動した。

満3歳児保育：

9月より随時受入れを開始し定員10名とした。はじめは年少組と一緒に過ごしたが、人数が増えてきてからは、ぴよぴよ組としての活動に移行した。満3歳児保育に高いニーズがあることが示された。

5. 総合的な自己評価結果

課題の到達度について達成の度合いの幅はあるが6指標いずれも「達成されている」という結果であった。指標内の各項目については、取り組むべき課題がみいだされた。B評価の2指標「教師の役割・資質向上」、「運営管理」については、教員キャリアの違いによっても自己評価レベルに差がみられた。特に安全管理、危機管理に関する全教職員の共通理解を持つよう留意する。

時代に応じて、新たな保育を模索していく中で、これまでの教育内容や教育方法の取捨選択が問われるようになってきた。今後も検討を続けていく課題である。

6. 学校評価保護者アンケート

学校評価保護者アンケートとして「園生活ふりかえり」アンケートを実施した。設問は「お子さんについて（4問）」「園からの情報発信について（6問）」「教育内容について（9問）」の計19問であった。回答形式は4択（そう思う／ややそう思う／あまり思わない／まったくそう思わない）であった。このほかに任意で自由記述を求めた。回収率は70%であり、全ての項目に欠損がなく有効回答だった。回答者のうち74%から自由記述がなされた。各回答に1点～4点を付与し得点の高いほうが、「そう思う」程度が高くなるように数値化した。表2「園生活ふりかえりアンケート」には、質問項目ごとに平均値、標準偏差（SD）、最大値、最小値を示した。また教職員に対しても、同様のアンケートを実施して「保護者はどのようにとらえていると思われるか」という視点から回答を求め、その平均値を併記した。

表2 園生活ふりかえりアンケート（保護者・教職員比較）

園生活ふりかえりアンケート（質問項目）	保護者				教職員
	平均	SD	最大値	最小値	平均
お子さんは、幼稚園生活を楽しんでいる	3.8	0.5	4	2	3.8
お子さんは、その年齢や発達なりに遊びや生活の中で決まりを知り、守ろうとする態度が育ってきている	3.7	0.5	4	2	3.6
お子さんは、園でしたことを家でもやってみたり、話したりすることがある	3.7	0.6	4	1	3.5
お子さんは、その年齢や発達なりに、良いこと・悪いことの区別ができる	3.6	0.6	4	2	3.5
園でのお子さんの様子は、行事、参観、クラス便り、降園時の担任の話し、ホワイトボードの「本日の活動」などで知ることができる	3.5	0.7	4	2	3.6
園は教育目標、保育の方針、内容について伝えている（入園時、クラス便り、わかふじ通信、クラス集会など）	3.7	0.5	4	2	3.4
園は、保護者と協力しながらお子さんを教育している	3.8	0.5	4	2	3.5
園は、お子さんについての相談や連絡に対応している	3.8	0.5	4	2	3.5
園は、来園時や電話などの際には、親切・丁寧に対応している	3.9	0.3	4	3	3.5
園は、お子さんのケガや、何かが起きた時などの状況を伝えている	3.6	0.5	4	2	3.5
園は、お子さんの発達に応じた経験ができるように配慮している	3.7	0.5	4	2	3.8
園は、ひとり一人を理解し、個性に応じた対応している	3.6	0.4	4	2	3.6
園では、教職員同士が協力して活動している	3.8	0.3	4	3	3.9
園は、健康作りや体力作りを進めている	3.9	0.3	4	3	3.9
園は、身近な自然や社会と関わることができるように配慮している	3.8	0.5	4	2	3.9
園は、人と関わる力が育つように配慮している	3.7	0.6	4	2	3.9
園は、お子さんが表現を楽しみ、表現する意欲を発揮することができるように配慮している	3.8	0.4	4	3	3.8
園は避難訓練、園外保育、交通安全指導などで、お子さんが安全に対する意識や習慣が身に	3.9	0.3	4	3	3.3
園は、植物栽培物、収穫、試食などを通して、園児の食育を育てている	3.7	0.5	4	2	3.6

「園生活ふりかえり保護者アンケート」結果は、各項目で平均3.5～3.9という高評価を得た。設問内容では「お子さんについて」の平均値は3.7、「園からの情報発信について」の平均値は3.7、「教育内容について」の平均値は3.8だった。「保護者の方々はこのようにとらえているのではないだろうか」と教職員が行なった結果よりも、いずれの指標も保護者の平均値の方が上回り、前向きな評価という結果であった。また自由記述（任意）では、子どもがここまで育ったことの感動や、教職員へのねぎらいや温かい言葉が寄せられた。一方、幼い乳幼児のごきょうだいのいるご家庭で親子遠足に対する負担軽減、多様な育ちのお子さんへの保育、預かり保育での子どもへの言葉かけについてご指摘をいただいた。

保護者から寄せられた回答は、教職員自身が行なった自己評価を客観的に捉え直すことにつながり、幼児の

育ちを支える保育の質の向上のために、園が家庭と共通理解を深めていくための貴重な機会となった。教職員については、主に教育時間に従事する者と、主に預かり保育に従事する者で、園児や保護者との関わる機会が異なるが、保育に関する共通理解を深めていけるようにしたい。

7. 今後の取り組み課題

「教育目標・教育方針」

- ・園の良さを生かした保育を引き続き具体的に考え実現していく。
- ・幼稚園の魅力が、外部の方にも伝わるようにさまざまな情報発信を継続していく。
- ・子ども主体の保育について、園として足並みをそろえて教育計画を進めていくことを大切にしたい。

「教育課程・指導計画」

- ・次年度は体力向上プログラム3年目となり、園外保育計画とあわせ3年間を通した取り組みの成果を検討しながらの教育課程のあり方や、年少、年中、年長の切れ目のない取り組みを進める。
- ・子ども主体の保育の展開について、年間を通した指導計画を、それぞれの年齢に即して積極的に取り組んでいく必要がある。
- ・幼児期の子どもが育つ環境や、子育て支援を巡る状況は変化しており、歴史ある園の良いところは残しつつ、今後も新しいことを取り入れていく。そのためには保育の意義を明確にし、教職員の教育観共有を図る。
- ・幼児の防災教育、幼児の人権教育の視点で、保育活動を見直し教職員が学びを深める。

「教育環境」

- ・異年齢交流は、わくわくタイム、園庭遊び、園外保育など日常保育の機会利用方式を今後も進めていく。
- ・これまで情報発信や受信でICT化を進めてきたが、これに留まらず、に日常保育の中でのICT活用についての学びを教職員で深めていく。

「教育の内容・方法」

- ・子どもが意欲的に取り組み、子ども自身の達成感につながる活動実践を教員相互に共有するよう努める。

「教師の役割・資質の向上」

- ・3年間を通して幼児期の体力向上、運動遊びへの取り組みは、重点的保育計画として継続する。
- ・日常的に預かり保育利用児の保護者とは、担任からクラス活動について聞く機会が少ない。特に年少児の場合に教職員から園の活動を積極的に伝えていく方法を探す。

「子育て支援」

- ・子どもの年間をとおした健康維持について、家庭との情報共有と協力のあり方を進める。
- ・保護者と一緒に育てていく意識をこれまで以上に高め、保護者が園に相談しやすい状況を継続的に整える。
- ・早朝保育および預かり保育のニーズも高く、保護者や家庭状況に応じた柔軟な対応をしていく。
- ・令和8年度から国で本格実施される「こども誰でも通園制度」についての学びを教職員で深める。

「地域住民や関係機関との連携」

- ・幼小接続事業、架け橋期のアプローチカリキュラム実践に向けての取り組みを進める。さらに幼中連携においても今年度の交流を継続的取り組みに発展させ幼小中連携への広がり視野に入れる。
- ・地域の0～2歳児の小規模保育施設との交流を継続し、他の保育施設へも交流を拡大する。
- ・地域の行事や交流に参加協力する体制を進める。

「運営管理」

- ・園運営に関する書類の見直し、点検を定期的に行なう。
- ・学校安全計画を見直す中で、幼児期の防災教育のあり方を検討する。

8. 学校関係者評価会議での評価

学校関係者評価会議は有識者2名（大学教員・特別支援学校教諭）、地域代表1名（町内役員）、保護者の会1名（会長）、園長、副園長、主任で構成された。

1) 小規模園ならではの良さが評価される。

昨年に引き続き、子ども一人一人が見えやすく、教職員の見守り、保護者の安心など皆で育てている点が評価される。前向きな保育の取組みなどが年度途中であっても現実していく柔軟性が高いと言える。。

2) 教員の意欲が高く、常に新しいことに取り組んでいる

今年度、キッズイングリッシュ、年間を通した異年齢交流の位置づけ、幼中連携など、いろいろな取組みが増えている点が評価される。昨年からの体力向上の取組みなどは、園外保育を継続的な確保も引き続き定着してきている点が、園内連携と教職員のモチベーションの高さが伝わってくる。昨年の学校関係者評価で出された「降園時刻の都合で、普段の様子が見られない保護者に対しての日常の情報発信」についても、今年度は対応されている。

3) 保護者にとっては、体力向上が子どもの姿の実感として感じられる点が評価される。

教職員が自主的に「幼児体育指導者検定」を受講し、理論的、合理的な体育指導を学んで資格を取ったことに敬意を覚える。体力が向上するといろいろなことに挑戦するという自信につながっていることが感じられる。

以上